

南宋袁甫の「朱陸折衷」論

中嶋諒

中国南宋前期に活躍した朱熹（一一三〇～一二〇〇）と、陸九淵（一一三九～一一九二）は直接に、あるいは往復書簡をもって激しい論争を繰り広げた。けれども南宋後期、彼らの再伝の弟子たちの世代から、いわゆる「朱陸折衷」論、すなわち朱熹と陸九淵を接近させていこうとする思想潮流が現れた。例えば陸九淵の高弟楊簡に師事した錢時（一一七五～一二四四）は、ときに「万人の有する心と理との相即に条件を附加す」ることがあり、それゆえに「実質として朱子学に非常に接近した思想となっ」ていった（石田和夫氏「錢融堂について 陸学伝承の一形態」）。

また朱陸双方に師事した包揚の子、包恢（一一八二～一二六八）は、陸九淵が心（とそれに備わる理）の公共性を強調し、特定の学閥党派による独占を否認した箇所に着目した。したがって包恢は陸九淵を称揚したものの、「陸学」の徒であるという帰属意識が希薄であり、それゆえ朱熹の学説も抵抗なく受け入れることができた（拙稿「南宋包恢の「朱陸折衷」論」）。このように同じく「朱陸折衷」論者とされる錢時と包恢といえども、その論調は異なるものであった。

今回取り上げる袁甫（一一七九～一二五七）は、陸九淵の門弟袁燮の三男で、包恢とともに陸学再伝の代表格とされる人物である（清・李紱『陸子学譜』卷一六）。この袁甫は、朱熹、張栻、呂祖謙とともに陸九淵を挙げ、これら「四先生に二道無し」（『蒙齋集』卷一四「鄞県学乾淳四先生祠記」）と提言するなど、朱陸のみならず、当時の道学者を一括する傾向があった。従来の研究でも、この袁甫の「朱陸（張呂）折衷」の提言が引かれることはあったが、その性格が詳述されることはなかったように思われる。そこで本発表では、袁甫の「朱陸（張呂）折衷」論について、錢時や包恢のそれと比較しつつ考察し、陸学再伝の弟子たちにおける「朱陸折衷」論の多様性を確認していきたい。